

## 「4月、5月は1年の要」

・・・セマナサンタのことなど・・・

言い古された言葉であるが、時の立つのは早いもので、「1年の計は元旦にあり」などと思っていたら、着任後の家探しやら、各種の行事を淡々とこなしている内に、はや3ヶ月たってしまった。

当地では4月と言えば、クリスマスやその他の宗教行事と並んだ、大きなイベント、「セマナサンタ(聖週間:復活祭の前の週間)」の行事がある。

春の訪れを祝い、あわせてイエス・キリストの受難、死、そして復活の栄光を祝い記念するもので、大体4月上旬に行なわれる。この期間中の主な行事として、教会ではミサを行い、キリストの受難を再現するために、



信者たちがキリスト像や十字架、棺などの山車を担いで、街中を練り歩く **Procesión** という行列が見ものである。

今年は見る機会が無かったので、以下の記事は、前回の滞在のときの、比較的小規模の教会で行なわれた行事の記憶をたどって、実況中継風にしたものである。

キリストの受難を今日に再現するかのごとく、体中を真っ赤に塗ったり、一見血だらけ風になった生身の人間が、十字架に括りつけられていたり、郷土役と思しき人が、槍をこのキリストに突き立てたと同時に、マイクを通して真に迫る声で、「ウー」と静かに囁き、首をがくんとたれて絶命した瞬間の演技など、演出は手が込んでいた。

金色のヘルメットに赤い衣装をつけた小タイコと、トランペツからなる音楽隊、白い布で赤い血の色に染まったキリストを清め、十字架から降ろして、教会の中まで担架で担ぎこむ、赤や白、青、黄色、紫などの衣装に身を包んだ信徒役など、それぞれの役割が決まっているのだろう。



清めの白い布まで赤く染まり、やけにリアル感を醸し出していたが、キリスト役の何と恍惚感に浸っていることか。まるで心底から自分がキリストになりきっているようだった。

宗教画に見る磔の痩せたキリストと違って、ちょっと太めな体型が滑稽感を漂わせていたが。人々の日常における心の支えとしての、信仰心を強く表したのだろう。



以前はセマナサンタ中は楽しいことをしてはいけないとも言われていたそう。楽しいという判断が個人個人で異なり、何を持って楽しいかは判断が難しい。

また、この期間中は肉類を食べずに、魚中心の食事をしてきたとも言われている。しかし肉好きの国民ゆえ、その習慣も少しづつ変わってきているのではなかろうか。スーパーなどでは、この期間中も、相変わらず多量の肉を販売しており、結構はやってた。

私は、普段は肉中心の食事にならざるを得ないが、この時ばかりは、市場で買ってきた魚を塩焼きにして、

テキーラの肴のつまみにして食べたが、これは宗教心とは少し異なるようだと言っている。時代の推移と、価値観の多様化による伝統行事の変化、日本でも考えさせられるテーマである。

今回採用したタイトルは、この4月最大の行事から類推して、「**Abril y mayo, llave de todo el año**」(アブリール イ マヨ ジャベ デ トード エル アニョ と発音し、直訳は、タイトルの通りである。農業の盛んなスペインでは、4月、5月の天候を気にすることから来たのだろうが、日本の諺は何だろう。) という諺から採用した。

書いているうちに、「春が来た、春が来た〜」(「春が来た」)、や「薨(いらか)の波と雲の波〜」(「こいのぼり」)など、タイトルから連想される昔覚えた歌が、思いつくままに、次から次へと口ずさまれて来た。ボラッチョ・ボニート氏も時には童心に帰るときもあるようだ。

しかし、このような現象は、ボケ現象の入り口に入ったなどと言う人もいる。一方、「昔の歌を口ずさむのは、他人に迷惑がかからない分なんとも無いよ、それどころか、駄文を性懲りも無く送って、他人に迷惑をかけているのを感じない行為こそ、入り口どころか、引き返されないところに来ているよ」などと言われかねない。

どうもすいません！日本で近頃頻繁に引き起こされる、企業不祥事が起きたときの、釈明記者会見時のトップに見習って、平身低頭あるのみ？

蛇足ついでに、さらに追加してしまおう。今本文を書きながら飲んでいるテキーラの名称が、諺の単語の一部とダブル「**mayorazgo**」(マヨラスゴ)であり、その意味は、私のことを言っているような、「長男とか長子相続権」と言う意味である。(今回の報告と関係ないが)

5月にはいと、講義予定が入っている。私にとってもまさにタイトルのようになりそうだ。

(2009年4月19日)

## 当日の会場中の表情

